

## 動植物園等と連携した生息域外保全等の実施状況

### 1. 動植物園等と連携した生息域外保全等の事例

#### ① ツシマヤマネコ

- ・平成 8 年より 5 頭の野生個体を確保し、平成 11 年より福岡市動物園の協力を得て飼育下繁殖を実施。平成 12 年に初めて繁殖に成功。
- ・危険分散のため、日本動物園水族館協会の協力を得て、9 園で 34 頭を飼育。5 園で繁殖に取り組んでいる。
- ・遺伝的多様性に配慮しつつ安定して繁殖を継続するために、飼育管理技術の向上や人工授精等の新たな技術の開発を進める。

#### ② トキ

- ・平成 19 年より多摩動物公園で分散飼育を開始。いしかわ動物園（平成 22 年より）、出雲市（平成 23 年より）、長岡市（平成 23 年より）でも分散飼育を実施。
- ・平成 19 年に佐渡島に野生復帰ステーションが完成。
- ・平成 20 年より、佐渡島において野生復帰のための放鳥を開始。
- ・平成 26 年に地域再生ビジョンにおいて野生復帰の目標としていた 60 羽定着を達成。

#### ③ イタセンパラ

- ・平成 22 年以降、岐阜県世界淡水魚園水族館・碧南市碧南海浜水族館・名古屋市東山動植物園・岐阜県水産研究所において、木曾川個体群の生息域外保全を実施。
- ・国土交通省中部地方整備局が、イタセンパラの生息環境の改善のため、木曾川におけるワンドの底泥浚渫等を実施。
- ・平成 26 年度には野外池でのイタセンパラ試行放流を実施、平成 27 年度には野生復帰に向けた放流ガイドラインを作成。
- ・その他、琵琶湖博物館等においても生息域外保全を実施。

#### ④ ムニンノボタン

- ・東京大学の小石川植物園において、生息域外保全や自生地調査等が古くから実施されてきており、昭和 60 年には増殖株の自生地への植え戻しが実施されている。
- ・自生個体の消失が続いており、現在確認できている自生個体は実生株のみ。約 200 株の植栽株が現存している。
- ・神代植物公園、富山県中央植物園、名古屋市東山動植物園、摂南大学薬用植物園、牧野植物園等でも生息域外保全を実施。

## 2. 今後、生息域外保全の取組が必要と想定される種の例

### ①哺乳類

- ・ オキナワトゲネズミ (CR)、トクノシマトゲネズミ (EN)、アマミトゲネズミ (EN)  
生息地の消失や外来生物 (マングース、ノネコ等) の侵入等により減少しており、特にオキナワトゲネズミは深刻。
- ・ ダイトウオオコウモリ (CR)、オガサワラオオコウモリ (CR)  
生息地の消失等により減少。いずれも生息地が限定されている。

### ②爬虫類

- ・ ミヤコカナヘビ (CR)  
生息地の消失、天敵 (イタチ、インドクジャク)、採取等が減少要因として指摘されている。近年は個体数密度が相当に低くなったと考えられ、目撃することが困難になりつつある。
- ・ イヘヤトカゲモドキ (CR)、クメトカゲモドキ (CR)、オビトカゲモドキ (EN)  
マダラトカゲモドキ (EN)、クロイワトカゲモドキ (VU)  
生息地の消失や外来生物の侵入、採取等により減少。いずれも生息地が限定されている。

### ③昆虫類

- ・ マダラシマゲンゴロウ (CR)、フチトリゲンゴロウ (CR)  
生息地の消失や外来生物の侵入、採取等により減少。いずれも生息地が極めて限定されている。
- ・ ゴイシツバメシジミ (CR)  
食草であるシシンランの減少や採取等により減少。環境省が増殖試験に取り組んでいるが、成功例が少なく、人工増殖技術の確立が必要。

### ④陸産貝類

- ・ 小笠原産カタマイマイ類 14 種 (CR+EN)  
外来生物 (プラナリア類、ネズミ類、アリ類) の侵入等により多くは激減。うち 5 種は、緊急避難として環境省が父島での室内飼育等を開始。